

Curious Mind 『好奇心』

“Time To Be Curious”

Childhood Education

April/may 1976, pp. 290—295

by Dorothy H. Cohen

子どもの好奇心とおとなのかかわり方について、示唆あふれる小論をもとに考察してみよう。

子どもの好奇心は、生まれた時はどんななのだろう。そして、それはどのように育っていくのだろうか。筆者は、レイチェル・カーソン (Rachel Carson) の『驚く心』(A Sense of Wonder) の詩を引用しています。

子どもの世界は新鮮で美しく

しかも、不思議と驚きで満ちている。

子どもが生まれたままの驚く心を、

生き生きと保つためには、少なくとも

その驚きを分かち合うことのできる

ひとりの友が必要である。

そして、その友も子どもと一緒に

彼の住む世界の喜びや感激や不思議さを

発見することである。

ローエン氏 (Dorothy H. Cohen) は、子どもと不思議な世界を分かち合う存在として、おとなのあり方に触れています。彼女は「ワークブックも、教育機器も、教科書も、コンピューターも、

どれも完全にびったりと子どもの好奇心と出会うことができな
い。おとなが人間として複雑な精神と感情をもつことが、子ども
の人間としての複雑な精神と感情に出会うことができるのだ」と
語っています。

さて、もしも好奇心の弱い子どもやおとながいたら、どうする
のでしょうか。彼女はそれについて、「好奇心はお互いに伝わり合
うものである。もし、子どもたちがすでに幼い頃好奇心を抱く態
度を失ってしまったら、好奇心の強い教師によって、再びそ
の心をとりもどせることだろう。一方、教師の方で新しい世界を
探索するのに遅ればせな人は、好奇心の強い子どもによって、驚
く心を持つ人になることができるだろう」と言っています。

それでは、一体、好奇心はどんな時に生ずるのでしょうか。以
下、彼女のいわんとしてるところを要約してみます。

「子どもはふつう、自分が知っていると思ったことの中に新しい
事象が加わってくると、そこに矛盾を感じる。矛盾とか葛藤は、
どちらにしても楽しく快い経験とはいえない。しかし、こういう
経験が、新しい学習の基礎になるのである。そのためには、環境
が豊かで、それが刺激となって、子どもが疑問や問題にぶつかる
ことである。しかし、豊かな教育環境だけでは十分とはいえな
い。子どもによっては、慣れない環境の中で恐怖心を抱き、環境

に圧迫されてしまう子もいる。だから、葛藤とか矛盾のように、
子どもにとって異質なものを、教師が興味や好奇心にかわるよう
心を配らなければならないのである」

ここでもやはり、単に豊かな物だけでなく、教師の人間として
の豊かな心くばりが大切であることを主張しています。

好奇心は、具体的にはどんなことから始まり、どのように変化
していくのでしょうか。子どもが好奇心を抱きそうな具体的なきっ
かけはいくらでもあります。それは個々の子どもによって異なる
ので一口では語れませんが、大切なことは、「子どもが好奇心を
抱きそうなことについて、教師がすべて知らなくてもよい。知っ
ていれば安心かも知れないが、子どもと同時に興味を抱き始めて
も、おとなはより早くそのことについて知ることができる。従っ
て、子どもへのアドバイスもできるわけである。だから、教師が
十分に知らないからといって、子どもの探索への欲求を満たして
あげられないということではない」と言います。さらに留意すべ
き点は、我々はふつう、子どもの好奇心を引き出すことには非常
に熱心になるが、一旦引き出した好奇心をどうするかについてあ
まり考えないという指摘でありましょう。子どもが好奇心を抱い
たら、それでおわりというものではありません。コーエン氏は、
「この時点で我々は失敗することが多い。環境からの刺激が大で

子どもが興味を抱きやすくなっているとしても、環境は子どもの好奇心の発展の手助けはしない。子どもに生じた好奇心はさらに広がらなければならない。つまり子どもの興味や好奇心を引き出すことと同様、それらを子どもが抱き続けることも大切なのである」と語っています。そして、子どもの好奇心を先へのばすためには、母親や教師のものの見方や理解のし方の影響力が大きく、それらが子どもの学習のガイドとなるといっています。

教材のもつ可能性と、子どもの発達段階を十分に知るということも、教師の大事な仕事です。たとえば、「三歳の子どもが、水の中にブラシをひたして壁に塗るといふ行為をしていたら、その子どもは、塗ること自体、つまり、感覚的経験を楽しんでいるのである。しかし二年後、同じ子どもが幼稚園で、画用紙の上に色や形を考えながら絵を描こうとしていたら、彼は最初の興味を發展させているわけである。もし、七歳の子どもが砂や粘土に水を加え、その形がなくなる程どろどろにするという感覚経験をしているとしたら、これは、その子どもは、教材の順応性または発展性、それに生産への可能性についての興味をのびしているのではなく、ずうっと以前に到着している経験を行なっているのである。このような一種の退行現象は、しばしば子どもが成長へのエネルギーを新しく補給している時にあらわれるものである」彼女

がここでいわんとしていることは、もし子どもが最初に抱いた強い興味や好奇心を、その先へのばすことができず、ある一定の段階でとどまっていたなら、教師はできるだけ子どもその様子に敏感でなければならぬということでしょう。

最後に時間の問題をとりあげて、子どもが好奇心を抱くには十分な時間が必要であるといっています。「教師はあまりそれについて急ぎすぎてはいけません。現代は、すべて機械的手段によって世の中が仕組まれているが、人間が好奇心を抱くためには、その生命のペースにあった十分な時間が必要である」そういう意味で、今は、人間が本来持つ生き生きした好奇心が生まれにくいのかも知れません。

筆者は、以前、美術教育家のローエンフェルド (Lowenfeld) 氏に直接教えを受けたというアメリカの女性から、氏がたった一枚の葉っぱでもいかに深くその美しさに感銘し、またその驚きが周囲の人々の胸の奥まで伝わってきたかについて話されたことがあります。

驚く心はおとなにしても子どもにしても、本物でなければならず、そこには人間だけかなし得ない行為があるわけです。

(十文字学園女子短期大学 江波諄子)